

第三部

今なお残る戦後処理問題

旧日本軍接收用地

読谷飛行場問題解決へ向けて

黄金の花さくむらづくり拠点

読谷飛行場は、日本軍によって、戦雲急を告げる非常時体制の昭和18年夏以降、19年の暮れにかけて作られた戦時用飛行場であった。それは国家総動員法的社会状況の中で、用地の接收は有無を言わさぬ強制的なものであった。神州不滅を信念とする日本軍は、地主に対する説明会で「戦争を勝ち抜くため」と大義を強調し、「戦争が終れば土地は返す」と口約をした。

沖縄戦は本土防衛の盾として位置づけられ、その逐行のため読谷飛行場は作られた。迫り来る敵軍を意識し、軍人、民間人、学徒等々、大動員による不眠不休、夜を日についての突貫工事であった。それは、まるで戦場そのものであった。

このようにして作られた読谷飛行場であったが、昭和20年4月1日米軍の沖縄本島上陸のその日のうちに、無抵抗のまま米軍に占領され、以来今日まで43年間にわたって米軍基地として使用（一部開放）されてきた。

昭和47年5月15日、戦後27年目にして、沖縄の日本復帰は実現した。ところが、この読谷飛行場の戦後処理問題は、復帰という行政の大転換期にもかかわらず手もつけられないまま、日本政府は米軍から読谷飛行場を引きつぎ、逆に「国有地」扱いをする手続きと共に、基地として米軍への継続使用を認める措置をとったのであった。

日本政府は、政府としての立場から戦後処理事案、または復帰処理事案については時を待たずに解決すべきであり、特に接收当時の事情から土地の所有権問題については、多くの疑義を残したまま推移してきた。

復帰後、読谷飛行場用地所有権回復地主会をはじめ、読谷村、読谷村議会は正式に、日本政府と国会及び米軍に対し「戦後処理問題であり、一日も早く解決されたい」との、数限りない陳情・要請を重ねてきた。それは正に関係者の血のにじむ10年余の訴えであった。

日本政府も、陳情・要請の主旨を受けとめ問題解決の姿勢を示したのである。それは直接の当事者である所有権回復地主会の要求通りではないが、政府の立場と地元所有権回復地主会の立場をそれぞれ考慮した「和解案」ともとれる「開発計画に基づく解決案」が昭和54年6月1日参議院沖特委において沖縄開発庁長官（三原朝雄）によって提示されたのである。

これを受けて、所有権回復地主会は、昭和57年5月に「読谷飛行場転用計画策定会議」を発足させ、読谷村は、昭和58年5月「読谷飛行場転用計画調査報告書」をまとめ、更に昭和59年3月「読谷飛行場転用計画審議会」を発足させ、昭和60年11月「読谷飛行場転用計画答申」を受け、村長はこの答申を「読谷飛行場転用計画」として政府関係機関に提出したところである。

このような経過の中で総理大臣（中曽根康弘）は、昭和61年2月7日「地元の土地利用構想を尊重して対処する」旨、国会（衆議院議長坂田道太）に報告した。ここに戦後処理事案としての読谷飛行場問題の解決策が総理大臣によって明確に示されたのである。これに対応すべく読谷村は「読谷飛行場転用基本計画」を策定した。

ちなみに、日本本土における旧軍の飛行場用地の処理はどのように行われたのか、それを知ることが極めて重要なことである。終戦の昭和20年、旧日本軍の飛行場は242件あった。それは膨大な件数である。しかし、当時の情勢から用地の処理は急がなければならない状況もあって、昭和20年から22年までには処理方法も決まったのであった。その方針に基づいて昭和35年まで

には約8割が処分されている。そのほとんどが平和利用のための転用、又は旧地主に返還されるなど戦後処理がスムーズに進められたのが実情である。

ところが沖縄県（読谷飛行場）においては、米軍の直接統治ということと米軍基地として使用されていることもあって、問題が解決されないまま43年間も年を重ねる結果となった。

一方、読谷飛行場は現在、米軍のバラシュート降下演習場として使用されており、今日まで幾多の事故、事件を引き起こしてきた。周囲は住民地域と農耕地があり狭くて適当なところではない。

昭和55年（1980年）10月9日第445回日米合同委員会は、「訓練場の移設を進めるための特別作業班」の設置に合意した。これを受けて日本政府関係機関は昭和57年度から昭和52年度まで必要な予算を計上し、移設に向け作業を開始し今日に至っている。

読谷村は、移設調査と移設準備には一定の時間が必要であるとの判断に基づき、静かにその「時間」の推移を見守ってきた。必要な時間の余裕を十分に与えたつもりであり、又政府機関にあっては移設作業は進められていると読谷村民は理解している。

さて、読谷飛行場問題の解決の鍵は、法制度の問題（読谷飛行場問題は、戦時下で発生した特殊な問題であり、その解決のための法制度は不十分である）もあるであろうが、それ以前に問題解決にあたる政府関係機関の意識の中に「自分自身の問題」であり、過去の問題でなく「現在の問題」として主体的に問題解決にあたらなければならない、という誠意と責任感、情熱が必要である。それが問題解決の大きな鍵と言えよう。

そのためには、沖縄の歴史上第三の受難とされている沖縄戦の実相を正しく受け止めるこ

とが大切なことであろう。それは今問題となっている読谷飛行場が沖縄戦に向けて作られた飛行場であるからである。

東京からとおく離れた南の島の問題として軽く考えるのではなく、日本国内の日本人の問題として責任と道義心に立って問題解決に取り組まれることが必要であり、既に戦後も43年間たち復帰後も16年が経過した。接収当時の「精神」に立って見た場合「これは罪であり恥であり、責任である」という深い認識に立って一刻も早い解決を必要とするものである。

さいわいにも昨年、復帰15年目にしてし、紆余曲折はあったが、やっと日本政府、沖縄県、読谷村という行政機関の間に共通の理解ができあがった。それが「読谷飛行場転用基本計画」である。これまでも遠く困難な道程であったが、これからは具体的に一つひとつ詰めていく作業であり第二次沖縄振興開発計画期間内に一定の芽出しを軌道に乗せることを目標としている。

戦後処理事案としての読谷飛行場転用基本計画であり、その解決のために法制度が最初から完備されている訳でもないのに、既存の法制度で活用できる分は活かし、活用できない部分については政令改正を求め更に関係機関の意思の疎通を密にし、新しい発想に立って問題解決がスムーズに進展することを期待するものである。

戦後処理問題には、戦中、戦後の人々の血と涙・苦勞と犠牲が凝縮された問題であるだけに、それに関わりを持つ人々の態度は真摯でなければならない。

この基本計画も具体的に進めていく仕事は、正に世紀の大事業である。今までの暗いイメージ「戦争→抑圧→基地→犠牲→事故、事件→被害」から、新しい21世紀への希望にもえた明るいイメージ「戦後処理の実現→戦争の鉄鎖・抑圧・苦悩からの解放→夢とロマン・希望と自信」へと変わり、黄金の花さく拠点形成となるので

ある。

それだけに困難な問題も予想されるのであるが、地元読谷村内にあっては戦争体験を有する世代と戦後世代を含めて、又、飛行場関係出身も、その他の方々もそして旧地主関係の所有権回復地主会員も、黙認耕作をしている人々も、全ての村民が心をつにして、知恵を出し、協力し、理解し合い“みんなで読谷飛行場の戦後処理をしよう”という心が大切であり、問題解決の鍵となるのである。そのことをお互いに肝に命ずることにしよう。読谷飛行場を作ったの

も人間であったが、その跡地に人間の生存と平和のための計画を打ち立て実現させ得るのも、また人間である。

戦場への道は長く凄惨であった。戦争は人間性を喪失させ理性を失わせるものである。壮絶な闘いが終ってあと、焦土の中から人間の理性と知性の芽が再び回復しはじめた。我々はこの体験を通して尊いものを学んだ。人間の理性と知性を失わすことのない平和創造の努力を怠ってはならない。

読谷飛行場の将来像

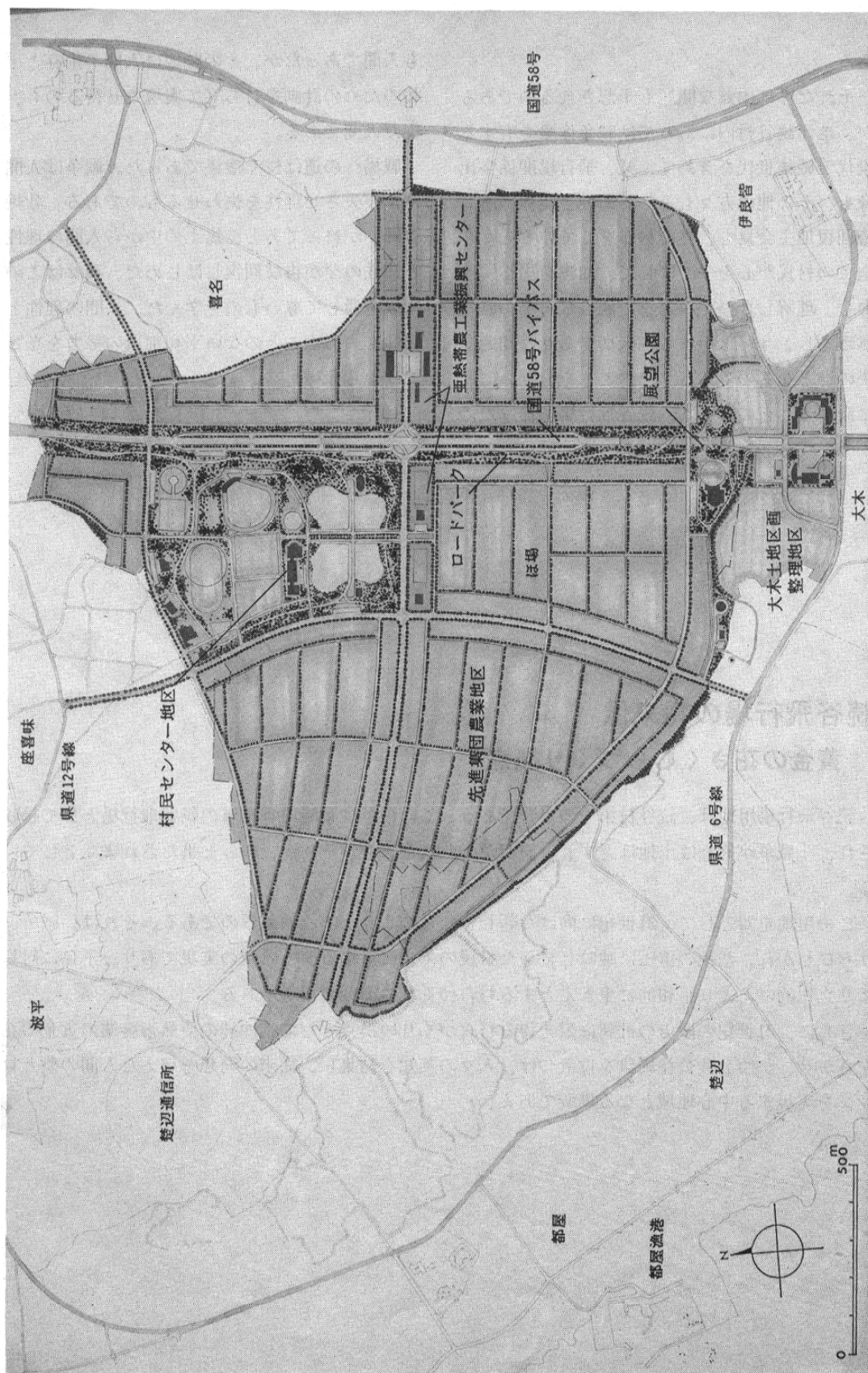
黄金の花さくむらづくり拠点

読谷飛行場用地は、読谷村第一の平野である。この平野は戦時中日本軍の臨戦飛行場として接収され、「戦争が終れば土地は返す」と説明が行われた。今、それが、やっと果たされようとしている。

この用地を器にして、21世紀に向けた新しいむらづくりが歩み始めるのである。それは、戦争にうちひしがれ、基地の重圧に呻吟してきた村民の未来に対する夢と希望の実現であり、子孫に対し、より文化的に、より平和的に生きんとするむらづくりの実戦の場所である。

さらに、21世紀の歴史の批判に耐え得るむらづくりの拠点として、沖縄の亜熱帯農業の黄金の花をさかせ、かつ公共公益施設を位置づけ、人々の英知を結集し、従来の発想を超えた人間の夢とロマンを実現する中心地域となる場所である。

読谷飛行場転用全体計画



2 競谷飛行場における米軍パラシュート事故記録

(但し、これは村の調査結果の一部であり、実際の事故は数多く発生している。)

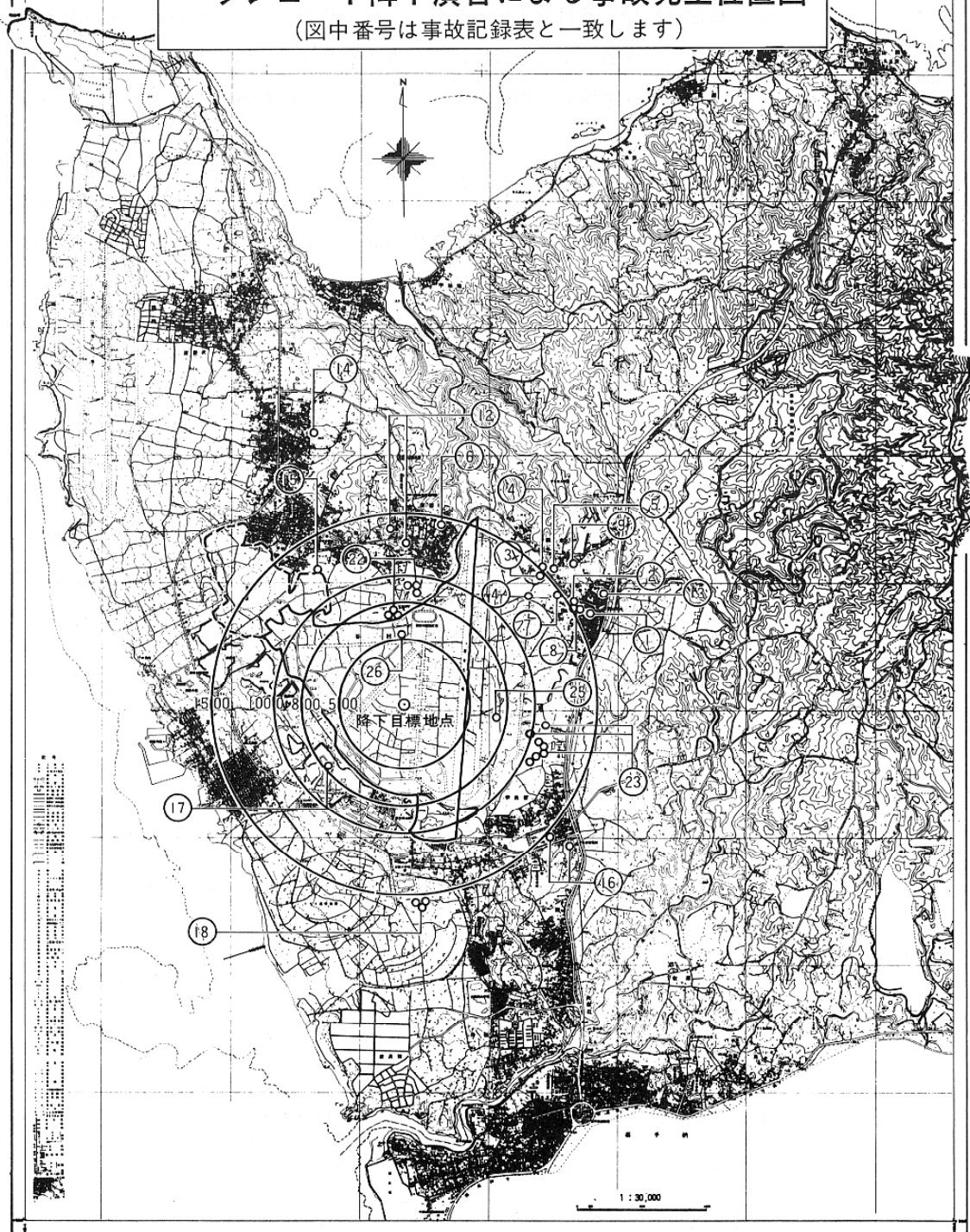
	事故発生年月日	被害の状況
1	1950 . 8 . 2	・喜名2212、比嘉自栄さん宅に補助燃料タンクが落下、知念ひろこちゃん(当時3才)が片足切断、全身打撲などで死亡。
2	1963 . 1 . 17	・喜名225、照屋栄徳さん宅セメント瓦住居に米軍貨物落下損害を与える。
3	1963 . 4 . 3	・座喜味2166、玉城蒲郎さん宅の5 m地点に貨物落下
4	1964 . 3 . 20	・座喜味部落、親志部落、喜名部落の数10カ所に約4 tのコンクリートのかたまりや、ジープ、武器等が落下し、座喜味2296番地の松本平郎さん宅には米兵が落下して屋根瓦を割り、喜名237番地の漢那朝章さんのキビ畑にはジープが落下して、キビ干坪が荒され、喜名部落から座喜味に至る12号線路上には弾薬の入った50ポンドの木箱が落ち、地域住民に不安と恐怖、そして大きな損害を与えた。
5	1965 . 6 . 11	・座喜味2306、棚原隆子ちゃん(喜名小4年生)が自宅の庭先で米軍のトレーラー落下事故で圧殺される。
6	1966 . 11 . 29	・座喜味203、比嘉八郎さん宅に米軍機から角材落下、屋根をぶち抜き瓦棧をへし折り床上に激突した。(事故発生時、朝食の準備中で間もなく食ぜんにつく時刻であった)
7	1967 . 6 . 23	・喜名421、備瀬智堅さん宅の屋根に米軍人が落下、屋根瓦を突き破る。
8	1970 . 5 . 4	・喜名2225、翁長マツさん宅セメント瓦屋根と喜名300、金城睦仁さんの鶏舎のトタン屋根及び日除け用扉2枚、陸軍特殊部隊の降下兵2人が落下し損害を与え、喜名2225、当間嗣信さん宅の庭先にも落下、花鉢の破損、花木に損害を与える。
9	1970 . 7 . 20	・座喜味2214、久場ツルさん宅におもりのついたパラシュート(約15斤)が落下、知花養鶏場西側約100mの道路上に落下。
10	1976 . 11 . 12 27	・飛行場内で黙認耕作中のキビ畑やイモ畑に石油の入ったドラム缶を数個一組に梱包したパラシュートが落下し、それを回収するトラックが農作物をふみつぶし被害を与えた。喜名部落内の屋敷に米軍のパラシュート落下。

	事故発生年月日	被害の状況
11	1977 . 12 . 4	・スカイダイビングクラブが降下レクリエーション中、畑を踏み荒らす。
12	1978 . 1 .	・座喜味453、照屋カマさん宅の屋敷内に米軍落下、菜園を踏み荒らす。 ・座喜味392、幸地松千代さんの豚舎近くに米軍兵が落下。
13	1978 . 4 . 11	・スカイダイビングクラブが降下レクリエーション中畑を踏み荒らす。 ・喜名小学校校庭に落下。
14	1978 . 12 .	・米軍女性兵が高志保1596 - 3、松田政国さん宅屋根の水タンクにパラシュートで落下。
15	1979 . 4 . 22	・スカイダイビングクラブの米兵が農耕している農夫の至近距離に落下、農夫がショックを受ける。
16	1979 . 5 . 26	・読谷高校東側校庭に米兵の無人パラシュート落下、米兵は補助パラシュートで国道58号県道 6 号線附近の伊良皆部落内の畑に落下。
17	1979 . 11 . 6	・夜間、読谷ニューハイツの住宅地域に米空軍のテストパラシュート（重り、シグナル燈付）が民家から13mの距離に落下。パラシュートには鉄コンの重り（7kg）と、強力な閃光を発するシグナル燈2基が取り付けられている。
18	1981 . 4 . 21	・午前8時30分、訓練中の米海兵隊のパラシュートが演習場内から大きくはずれ、古堅小学校近くの黙認耕作地に落下した。当時学校では生徒約千人が朝礼をしており、今にも頭上に落ちそうになったパラシュートに騒然となった。
19	1981 . 8 . 18	・強風下にもかかわらず米海兵隊は演習を強行し、7人のうち2人が目標地点から大きくはずれ演習場外の民間地域に落下し、農耕していた農夫の目の前に落下したため、大きなショックを受ける。
20	1981 . 11 . 19	・米空軍の降下兵がターゲットをはずれ、イモ掘り学習を終え、教師、母親と整列を組んで帰宅途中の幼稚園児の頭上スレスレに落下したため、園児132人、教師4人、母親13人が大騒然となり、大きなショックを受けた。
21	1986 . 4 . 28	・その日、102人の米兵が降下した。その中の3名が目標を大きくはずれ、滑走路東側場外へ落下。

	事故発生年月日	被害の状況
22	1986 . 6 . 25	・村運動広場、多目的広場へ5名の米兵が落下、にもかかわらず演習を強行し今度は6名の米兵が目標地点を大きくそれて、伝統工芸センター、保育所の西側5m地点、福祉センター後方、イモ団地方面へ落下、あわや一大惨事。
23	1987 . 4 . 15	・高高度からの訓練はしないと約束したにもかかわらず実施し、7名の米兵が目標地点を大きくはずれ伊良皆のゴルフレンジ近くに落下、近くで農作業をしていた農家の皆さんに大きなショックを与える。
24	1988 . 7 . 26	・演習通報もなく、現場の警備体制もないまま、抜き打ち的に演習を実施し、滑走路東場外へ2名の米兵が落下。
25	1988 . 8 . 17	・降下中の米兵パラシュートが上空において異常が起り、パラシュートを切り離す、無人になったパラシュートは滑走路東側の場外へ落下、補助パラシュートで降下した米兵も目標地点から大きくはずれて伊良皆運動場近くのキビ畑に落下する。
26	1988 . 10 . 27	・演習中止が発表され、現場の規制もなく人々が往来する中で演習が実施され、2kgに及び米兵の鉄カブトが通常の規制区域外である伝統工芸センター南側のキビ畑に上空300mから落下した。

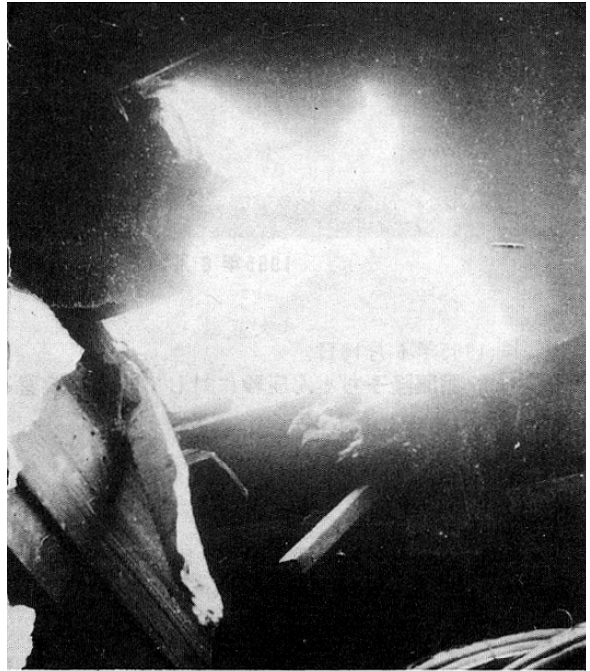
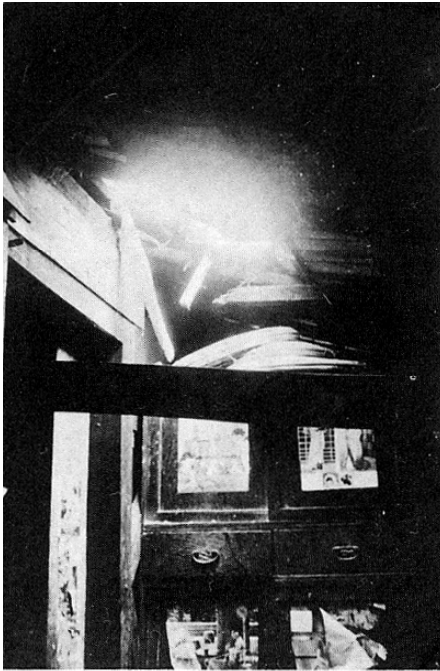
パラシュート降下演習による事故発生位置図

(図中番号は事故記録表と一致します)



3 資料編

パラシュート降下ミスによる事件・事故写真



▲1966年11月29日 民家に8.5kgの角材が落下し、破壊された住宅。

(座喜味203番地 比嘉八郎氏宅)



1965年6月11日
このトレーラーの落下によって
棚原隆子ちゃんが圧殺された。

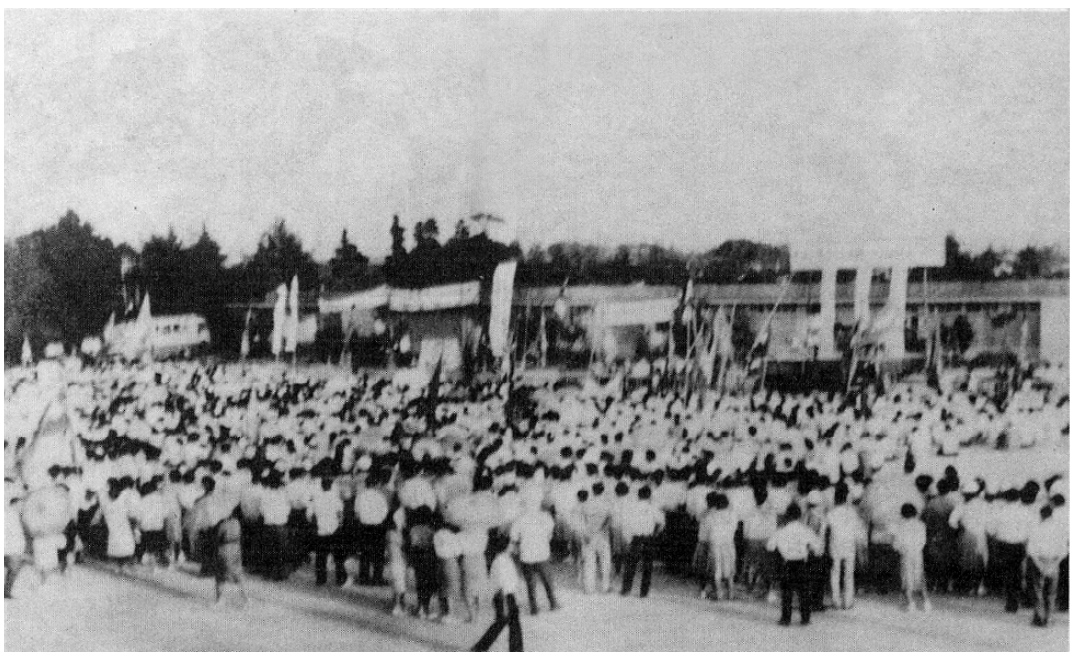
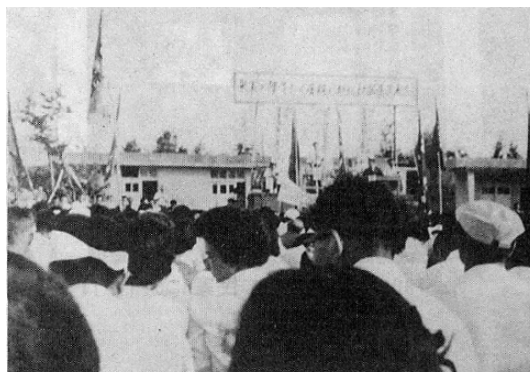
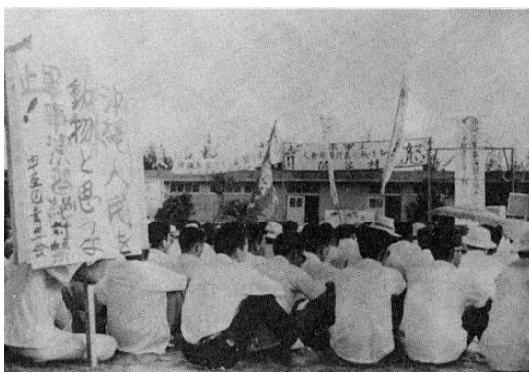




1965年6月11日 柵原隆子ちゃん事件発生

1965年6月18日

柵原隆子ちゃん圧殺に対して、米軍演習を糾弾する県民大会（喜名小学校）



編集を終えて

平和施策の一環として今年から初めて取り組まれた第1回読谷村平和創造展は、「日常的に平和問題を考える機会」とすることを目標に掲げスタートした。それは、読谷飛行場におけるパラシュート降下演習の激化や湖上訓練、民間地域での破弾事件などにみられる「基地の島、沖縄」の現状を直視しなければならないということと、ややもすると私たちの村民（県民）が演習や基地被害に慣れてしまい、その異常性を認識し訴えることを忘れてしまったのではないかという反省から出てきたテーマである。

「日常的に平和問題を考える機会」にするためには、これまでの村民の動きや行政が進めてきた平和施策の一つの資料としてまとめてみることも重要だと思い、この小冊子ができた。

終戦からこれまでの村民の動きを網羅することは紙幅の都合もあり次回にゆずり、今回はある程度の沿革と村民の生活に密着した平和行政「返還軍用地の平和利用」と読谷飛行場で現実に行われている演習やこれからの村づくりの根幹となる事業である「読谷飛行場転用基本計画」を中心にまとめてみることにしたのである。

編集を終えてみて感じることは、戦争により一時にして破壊された村の復元にかくも長い年月が必要とされたかということである。換言すれば、戦争ほど悲惨で非経済的なものはないということでもある。

戦争さえなければ、多くの人が肉親を失うことなく、家屋敷から追われることなく、畑を基地に接収されることなく、こんな小さな島沖縄が「東洋の要石（keystone of pacific）」と言われるほどの基地を抱え込むこともなかったといえる。

本文でも概説したように、村民と役場に働く人々とが、返還軍用地の跡地利用、戦後処理事

業に進進しなければならなかった原因もここにあるのである。

跡地利用事業の推進には、長い年月と多くの村民の大きな協力が必要であった。そしてその中で村民が主体的に取り組んできた様子も彷彿させてくれた。資料収集を進める中では、各字各地域の文化事業も、生活基盤や生産基盤の整備も多くの先輩諸氏が幾多の苦勞を乗り越えて、実現されたのだとも感じた。

私たち村民は、これまで築き上げてきた成果を大切に守り抜くために今後も立ち上らなければならないし、戦後処理事業を始め、多くの分野の村づくりを進めて行かなければならない。

いま、振り返ってみると、具体的な事業の推進が実は平和施策の一端を担い、村民一人ひとりがその主役であったのだと感ずるものである。この意味から、村民は意識するしないにかかわらず、日常的に平和行政に携わってきたのである。

戦後この間、生きるための基本的なものの整備が1つ1つなされてきたし、これまでの時期は復興の時代であったともいえるのである。さらに、その中で新たな発展への芽生えも出てきている。読谷飛行場転用基本計画がそれである。村民一人ひとりが主体的に行政と一体となって問題解決に取り組むことにより、21世紀へ向けた戦後処理事業の枠を越えた村づくりへの展開ができるのであり、もうその時期に来ていると思うのである。

平和は座して待つものではなく、一人ひとりの自覚と小さな第一歩（行動）が大切であり、その積み重ねの上に築かれるものである。

1946年8月、読谷村建設隊は戦後復興の担い手として読谷村に入った。21世紀に向けた村づくりの第2の読谷村建設隊は、今生きる私たち一人ひとりである。

第1部「読谷村と沖縄戦」については、『読谷村史第六巻』戦争編（仮題）の調査準備の段階にあるため1969年読谷村役所発刊の『読谷村誌』を軸に既刊書籍の中から「読谷村と沖縄戦」に関する部分を抜き出して構成しました。転載を快く許可して頂いた関係機関及び関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

さらに、戦争写真については、沖縄県立平和祈念資料館、月刊沖縄社の御協力を得ました。また、写真及び資料を提供して頂いた皆様に、記して謝意を表します。

平和の炎 Vol.1

第1回読谷村平和創造展

編集 読谷村役場 総務部 企画課
発行 読谷村役場
印刷 オフセット沖縄
沖縄市山内4-2-24
109893(3)0701
